

分科会 C

「社会や世界と関わりながら、人間性を深め主体的に学びに向かう力の育成をめざして」

コーディネーター： 柘植 良雄（岐聖大）

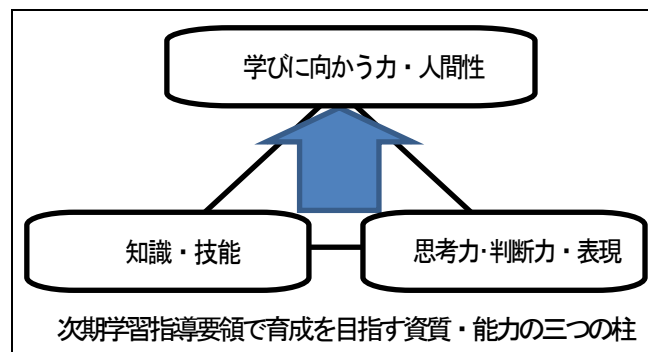
コメンテーター： 浅沼 茂（立正大）、加納誠司（愛知教育大）、大石 晴美（岐聖大）、
龍崎 忠（岐聖大）

この分科会の趣旨

新しい教育課程の方向性を一言で表すなら、学習内容の知識・技能の習得だけに留めるのではなく、自ら問いをもって自ら考えていくような「学び方や人間性の深まりまで求めていく資質・能力への育成」へと大きく舵をきったことである。このような動きは、今回の学習指導要領改訂の経緯の中で「育成すべき資質・能力の三つの柱」と表現され整理されてきた。本分科会 C においては、その中の「学びに向かう力、人間性等の涵養」を軸に議論を展開する。

学びに向かう力は、これまで評価の観点とされてきた「関心・意欲・態度」に当たる新しいワードである。

ただ、関心・意欲・態度がそのまま学びに向かう力に移行されたのだと安易に考えるのは極めて危険なとらえである。例えば、三つの柱の構造を見てみると、学びに向かう力・人間性は三角形の頂点に位置していることがわかる。これは、学びに向かう力とは、知識・技能を働かせ思考力・判断力・表現力を発揮させながら進んでいく、学びの営みを貫くプロセスでとらえた資質・能力であることを意味している。



また、この学びに向かう力は、単元が終わって完結されるものではない。学んだことから自分の生き方や社会に活かしてこそ、さらに効力を発揮するのである。これらを意識して授業展開しなければ人間性まで高めることはできないだろう。学びに向かう力、人間性等は、学びや育ちを長いスパンでとらえ、じっくり確実に育んでいくことが望ましい。だからこそ、その結びの言葉として「涵養」と表現されているのである。

学びに向かう力は、学校現場において見えにくい資質・能力であることも確かである。この課題に対して、本分科会 C では2日間にわたり顕在化を図っていく。大会1日目は岐阜聖徳学園大学附属小・中学校のその日の授業の実際と子どもの姿から議論する。そこで出た視点を2日目につなげ学びを深めていきたい。2日目のメインは、本分科会の課題に対して義務教育の入り口と出口を意識し授業研究を展開してきた2人の実践者の指定発表からアプローチする。

2日間を通し、子どもが主体的に学びに向かい人間性を深めていくプロセスとは何なのか？いかにカリキュラムをデザインすれば、学んだ後も進んで人生や社会、世界と関わっていくのか？参加者一体となって議論を深めていく予定である。